

平成 30 年度 アドバイザー派遣事業実施レポート

研究団体名	尚徳中学校区教育推進協議会
研究テーマ	「学びの共同体づくり」理論・手法を取り入れ、仲間とともに主体的に高め合う活動を通して、「学び合い、語り、つながる生徒の育成」をめざした学習活動の展開
アドバイザー	かわち学座（学びの共同体研究会）馬場 宏明 先生 馬場氏は東大阪市立金岡中学校の元校長。現在、「学びの共同体」理論・手法のアドバイザーとして研究団体「かわち学座」を立ち上げ、活動しておられる。馬場氏には本校が「学びの共同体」の実践を始めた 8 年前より毎年アドバイスをいただいている。
研究会実施日	平成 30 年 6 月 18 日（月） 9：50～10：35 数学科公開授業 10：45～11：30 社会科公開授業 11：40～12：30 道徳研究授業 13：35～14：25 理科研究授業 15：40～16：50 研究協議、指導助言 平成 31 年 1 月 25 日（金） 9：55～10：45 家庭科公開授業 10：55～11：45 音楽科公開授業 11：55～12：45 数学科公開授業 14：00～14：50 社会科研究授業 15：10～16：50 研究協議、指導助言
研究会実施場所	米子市立尚徳中学校（米子市日原 1 4 6 番地）

研究の成果

本校は8年前より「学びの共同体」理論に基づいた授業実践を行っている。「学びから逃走する生徒を学習に戻したい」という当時の職員の熱い思いから始まった実践である。

授業では生徒同士の学び合いを大切にしている。そのために「共有課題」を設定し、班の形になって生徒同士の学び合いを促す。

しかし課題を示して班の形にすれば学び合いが起こるわけではない。



班の学び合い

まず、共有課題が生徒にとって魅力的なものになっているか、ということである。穴埋め問題のような、単に資料を読み取るだけのものでは、学び合いは生まれにくい。そこに「分かった!」とか「なるほど!」といった驚きや感動があれば、双方に「学び合い」の喜びが生まれる。指導者は生徒の日頃の学び合いの状況を観察しつつ、後の「ジャンプ課題」につながるような魅力的な課題を設定しなければならない。課題設定は主体的・対話的



コの字型の発表

的で深い学びの実現に向けた授業改善にとって大切なポイントである。生徒が各教科の特質に応じた見方や考え方を働かせることができよう、課題の設定について今後も研究を進めていきたい。

また、「学び合い」のためには、わからない生徒が「教えて」と言える関係性が大切である。「教える生徒」「教えられる生徒」という縦の関係ではなく、対等な関係が「学び合い」につながる。これが「学び合い」のための大切な条件となる。

「学び合い」のためには、相手を信頼し「わからない」と言える文化が必要である。これは全職員が共通理解し、取り組んでいかなければ出来ることではない。これまでの8年間の取り組みを未来につなぐために、私たちはこれからも研究と実践を重ねなければならない。



魅力ある課題 学び合う関係